

8. 昆虫類（鱗翅類）

福岡県には、チョウ類約100種、ガ類約2200種以上が生息するが、ここでは、調査対象を、チョウ類全種および、ヤママユガ、ヤガ、シヤクガ科などのガ類を含む大型鱗翅類に限定した。チョウ目に関しては、すでに環境庁(1991)によるレッドデータブックが公表され、チョウ類43種、ガ類7種が絶滅の恐れのある種として絶滅危惧種、危急種、希少種にランクづけられている。その後、『日本産蝶類県別レッドデータリスト(1992年)』(矢田・上田編, 1993)が公表され、福岡県からは絶滅種4種、絶滅危惧種11種、危急種18種、希少種10種の計43種がリストアップされた。その前後から、県単位のレッドデータブックの編纂がはじまり、九州においても、すでに熊本、沖縄、宮崎で県別レッドデータブックが出版された。しかし、福岡県に関しては、これまで鱗翅類を含むレッドデータブックの出版はされていない。今回の福岡県版レッドデータブック編纂にあたっては、1997年より3年間にわたり鱗翅類分科会が中心となって現地調査、ならびに標本・文献調査を行い、最新のより信頼のおける情報を集約した。また、チョウ類の場合は、日本産蝶類県別レッドデータリストを基礎に、最近の情報を考慮して暫定的に仮リストを作成し、現地調査によって生息状況の確認を行った。また、福岡県チョウ類データベース(福岡県、九州大学、北九州市立自然史博物館、博多昆虫同好会の共同編纂)をもとに過去の記録の年次変化をたどり、仮リストにあげられた種の正確な生息状況を把握し、そのランクづけの根拠をなるべく客観的に示すよう努めた。なお、2000年4月に環境庁から最新のレッドデータリストが公表されたが、その中に含まれている鱗翅類のランクづけに関する情報は本リストにも盛り込まれている。以下に本レッドデータブックに選定した鱗翅類56種をカテゴリー別(絶滅1種、絶滅危惧Ⅰ類16種、絶滅危惧Ⅱ類20種、準絶滅危惧19種)に概説する。

カテゴリーと選定基準

チョウ類・ガ類とも、県カテゴリーとしては、環境庁のカテゴリーの新基準に準拠し、絶滅種(野生絶滅)、絶滅危惧Ⅰ類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧の4つのカテゴリーを設けた。環境庁の新基準はIUCN(国際自然保護連合)の新基準(IUCN, 1994)をもとに検討を加えたものであるが、ここでは環境庁の基準のうち定量基準の採用が可能なB項の「分布産地数、生息面積の減少率」を基準に選定した。具体的には、選定の方法について、日本鱗翅学会が1999年に提案した方針にしたがった。つまり、広域分布する種では、定性的な把握は市町村あたりの生息数の変化とし(B項広域分布)、また生息地の数が少なくまた生息面積が小さい場合(B項局限分布)には開発による消失が危惧されるので評価の対象とすることとした。つまり、基準年(1960年以前)における生息情報の記録(主に文献、標本調査による)に比して、現在(1997~1999年)の産地数の減少率が50%以上の場合が絶滅危惧Ⅰ類、同じく減少率が20%以上50%未満の場合が絶滅危惧Ⅱ類、10%以上20%未満の場合が準絶滅危惧としてランクづけした。

- 絶滅(EX)：かつては福岡県に生息が確認されていたが、ここ50年以上にわたって生息が確認されず、本県では絶滅したと考えられる種。
- 絶滅危惧Ⅰ類(CR+CN)：基準年(1960年以前)における生息情報の記録(主に文献、標本調査による)に比して、現在の産地数の減少率が50%以上の場合。旧基準の絶滅危惧種(E)に相当。
- 絶滅危惧Ⅱ類(VU)：基準年(1960年以前)における生息情報の記録(主に文献、標本調査による)に比して、現在(1997~1999年)の産地数の減少率が20%以上50%未満の場合。旧基準の危急種(V)に相当。
- 準絶滅危惧(NT)：基準年(1960年以前)における生息情報の記録(主に文献、標本調査による)に比して、現在(1997~1999年)の産地数の減少率が10%以上20%未満の場合。旧基準の希少種(R)に相当。

重要なハビタット

チョウをはじめとする大型鱗翅類は、幼虫、成虫とも食植物性の種が圧倒的に多いため、植生や植物群落を提供する生息場所（ハビタット）が最も重要である。特に、森林、草原、植栽地など植物の豊かな場所が鱗翅類にとってベースとなるハビタットである。しかし、一部の種は、湿地、河川敷あるいは海岸植生をハビタットとしている。本書で選定された種の重要なハビタットを以下に述べる。

自然林としては、ブナ（フジミドリシジミ）、ミズナラ（アイノミドリシジミ、エゾミドリシジミ）、シオジ（ウラキンシジミ）、イロハカエデ（ミスジチョウ、チャオビフユエダシャク）、ヤマザクラ（メスアカミドリシジミ）、キハダ・ミズキ（スギタニルシジミ）、ハリギリ（キバネセセリ）などの夏緑樹林がまず基本的に重要である。また、ウラジログシ・イチイガシ（ルーミスシジミ）、アラカシ（キリシマミドリシジミ、リストにはあげていないがランク外の注目種）、など照葉樹林、更に、クヌギ・コナラ（ミヤマセセリ、アカシジミ、ミズイロオナガシジミ、オオミドリシジミ、クロシジミ）やエノキ（オオムラサキ、ヒオドシチョウ）など的人為的に造られてきた雑木林も重要である。草原的ハビタットとしては、しばしばクヌギ・コナラ林の下草として生じるミヤコザサ・スズタケ群落（ヒメキマダラヒカゲ）、ネザサ・ススキ群落（ギンイチモンジセセリ、キマダラモドキ、クロヒカゲモドキ）があげられる。いわゆるシバ草原のハビタットとして、スマレ類（オオウラギンヒョウモンなどの大型ヒョウモン類）、海浜性植物群落のミヤコグサ、コマツナギ（シルビアシジミ）、タイトゴメ、ツメレンゲ（クロツバメシジミ）も重要である。特殊なハビタットとして、岩角地植物群落のイワレンゲ（クロツバメシジミ）、コバノクロウメモドキ（ミヤマカラスシジミ）、石灰岩台地植物群落のスズシロソウ（エゾスジグロシロチョウ）、ツゲ（エチゴハガタヨトウ）など、また水生植物のガマ群落（オオチャバネヨトウ）などもあげられる。

福岡県の鱗翅類の衰亡

福岡県のチョウなどの危機的状況をまとめたものとして、レッドデータブック（環境庁、1991）、日本産蝶類県別レッドデータリスト（1992年）（矢田・上田編、1993）などがある。これらの資料ならびに今回まとめた福岡県の鱗翅類のレッドデータ種を通覧して指摘できるのは、福岡県を含む九州に産する多くの種に著しい減少傾向が見られることである。これらの種は九州が分布の南限であったり、一般に山岳地や火山性草原などの限られた特殊な場所にしか生息しないなどの特徴がある。また、本書に選定されたレッドデータ種には、ハビタットと関連したいくつかの共通の特徴があり、それらの衰亡には、共通の要因が考えられる。

- ・シバ型草原、川原、荒地性の種の衰亡が著しい。


都市化、宅地化、河川敷整備、自然海岸の減少などがその要因と考えられる。オオウラギンヒョウモンなどのヒョウモン類、タイワンツバメシジミ、シルビアシジミ、クロツバメシジミ、ツマグロキチョウなど。

- ・雑木林（クヌギ・コナラ林など）を生息場所としている種の減少が著しい。

農業の近代化、宅地化などによる雑木林の伐採が主な要因であろう。オオムラサキ、キマダラモドキ、ヒカゲチョウ、クロヒカゲモドキ、ミズイロオナガシジミ、オオミドリシジミ、クロシジミなど。

- ・森林性でとくに局所分布をする種の減少が著しい。

自然林の伐採、スギ林などの人工造林がその主要因と考えられる。ルーミスシジミ、ミヤマカラスシジミ、アイノミドリシジミ、メスアカミドリシジミ、フジミドリシジミ、スギタニルシジミ、キバネセセリなど。



以上の種を通覧すると、旧北区、アムール、中国西部などの温帯～寒帯に分布の中心があり、分布のパターンが遺存的で、そのハビタットは草原、荒地ないし疎林を中心とし、食草や生活環の限定されたものが開発の影響をうけやすく、衰亡しやすい傾向がある。

本文をまとめるにあたり、種々アドバイスをいただいたり文献閲覧に便宜をはかれた九州大学名誉教授白水 隆博士に御礼申し上げます。

(矢田 脩・上田 恭一郎)

調査協力者、生息確認者：福田 治，井手定雄，井上準一，景浦 宏，川上太朗，溝部忠志，森田公造，小田切顕一，佐々木公隆，新海義治，上田恭一郎，(故)上田将人，矢田 脩

絶滅 (福岡県)

ギンイチモンジセセリ

チョウ目 セセリチョウ科 HesperIIDae

学名: *Leptalina unicolor* (Bremer & Grey, 1853)

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 1901年に英彦山近くの小石原で確認された記録があるが、その後全く確認されていない。本種は100年間も再発見されていないし、日本産蝶類県別レッドデータリストでも、「絶滅種」とされている。しかし、本種は新たな移入や人為的導入によって、再定着する可能性がある。

分類・形態: 前翅長約18mm。翅表は黒褐色で無紋、雌の前翅端は雄に比べてよりとがりが強いが、外観上雌雄の差はほとんどない。裏面は、季節の変異が顕著で、春型(第1化)では後翅裏面中央の条線は銀白色で、一方夏型(第2, 3化)ではこの条線は裏面の地色に近い黄褐色となるため目立たない。地理的変異は認められていない。腹部は著しく長く、また翅形斑紋が特異なため種の同定は容易で本種に紛らわしい種はない。

分布: (県内) 小石原村が唯一の産地

(県外) 北海道~九州に分布するが、いずれの地で

も局地的。九州地方では、宮崎県、鹿児島県では平地に産するが、熊本県、大分県では火山草原地帯などに分布するものの、平地ではまれ。

(国外) 中国(中・北部)、ロシア極東地域、朝鮮半島

生活史・生態・生息地: 温暖地では年2~3回発生し、南九州の低地では、4月~5月上旬、7月、8月下旬~9月の3回発生する。しかし、九州の山地帯(九重、阿蘇)では年2回、寒冷地では年1回の発生となる。幼虫の食草として、イネ科のみが知られており、主なものとしてススキ属のススキ、チガヤ属のチガヤ、アブラススキ属のオオアブラススキ、アブラススキなどの報告がある。母チョウは枯れたススキの茎、葉、穂や新芽に1卵ずつ産卵し、特に枯れた茎に産卵することが多い。終齢(5齢)幼虫で越冬する。生息地は、主に乾性の草原で、鉄道線路、高速道路法面や海岸地帯の草原に発生することもある。

(矢田)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

キバネセセリ

チョウ目 セセリチョウ科 HesperIIDae

学名: *Bibasis aquilina* (Speyer, 1879)

カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 1958年に星野村の熊渡山山頂で採集されたのが最初の記録である。その後1961年に同じく星野村の仁田原で目撃、また1977年に矢部村釈迦岳で採集されているが、その後の確実な記録はない。しかし、釈迦岳では生息地周辺の植生は比較的良好に保存されているので、いまでも生息していると考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストでも、「絶滅危惧種」とされている。

分類・形態: 前翅長約21mm。後翅肛角部はつよく突出しない。表裏とも黄褐色、前翅裏面中央に一字状の白斑列が現れ、同定は容易である。九州はじめ暖地に産するものは北海道産のものに比べると、より大型で、翅の色もより濃色である。

分布: (県内) 星野村および矢部村の山地帯のみ

(県外) 北海道~九州。関東地方以北以外では、山地性で局地的でまれ。九州地方では、対馬に産するものの、長崎県本土、佐賀県には産しない。

(国外) 中国、ミャンマー、ロシア極東地域、朝鮮半島

生活史・生態・生息地: 年1回の発生で、6月下旬から9月上旬まで見られるが、最盛期は7月中旬~8月上旬まで。幼虫の食草として、ウコギ科のハリギリ(センノキ)のみが知られている。生息地は、冷温帯ないし山地の落葉広葉樹林である。九州、四国では400~800mの山地落葉広葉樹林に見られるが、樹林内部では少なく、林縁や溪谷に沿った路上や山小屋周辺に多い。

(矢田・福田)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

ルーミスジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名: *Panchala ganesa* (Moore, 1882)

カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 1962年に福智山での雄の採集記録のみで、以後記録がない。生息地周辺のイチイガシを含む照葉樹林がほとんど伐採され、生存が危ぶまれる。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「絶滅種」とされている。1997~1999年の調査でも再発見はできなかった。

分類・形態: 日本産は日本固有亜種。前翅長約16mm。翅表の地色は黒褐色、翅の基半部に明るい青藍色斑をもつ。ムラサキシジミに似るが、より小型、翅表の青藍色斑は明るく紫色を帯びることがない。裏面の地色もより明るく両種の識別は容易。

分布: (県内) これまで福智山 (門司水源池) のみ (県外) 関東 (房総半島), 近畿, 中国, 四国, 九州地方のほか、島嶼では、屋久島と隠岐に分布し、いずれの地でも局地的

(国外) ヒマラヤ西部からインドシナ半島北部, 中

国大陸, 台湾

生活史・生態・生息地: 年3回, それぞれ6月中~下旬, 8月, 9月に発生するのが一般的。年2回や年1回の説もある。多くの地域では, 8月下旬~9月中旬に最も個体数が多い。幼虫の食樹として, ブナ科のイチイガシ, ウラジロガシなどが知られる。成虫で休眠越冬。越冬した母チョウは翌春食樹の新芽鱗片の内側に1個, 時に2個産卵。生息地は, イチイガシ, ウラジロガシを含むシイ, タブ, カシ類の高木の繁茂する照葉樹林帯で, 林床には低木が茂り, 高湿で薄暗く所々こもれ日が当たるような林内環境である。しかし, そのような地域でも産しない場合が多く, 本種の生息地が局限される原因は不明。

法令などの指定状況: 地域指定 (奈良県春日山) の国の天然記念物

(矢田)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

スギタニルリシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名: *Celastrina sugitanii* (Matsumura, 1919)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1963年に矢部村御側 (オソバ) (標高350~400m) で1雄が採集されたのが本県最初の記録である。1970年にも添田町障子岳で1雄が採集されたが, 以後1998年まで記録がなく, 日本産蝶類県別レッドデータリストでは, 福岡県の「絶滅種」とされた。しかし, 本種の再発見は星野村で1998年1雄の採集にはじまり, 翌1999年には御側の近くでかなりの数の個体が採集・確認され, 築城町寒田でもかなり採集された。

分類・形態: 日本産は3亜種が認められている。前翅長約14mm。ルリシジミに似るが, 雄の翅表の地色藍色部はやや紫色を帯び, 後翅表外縁黒褐帯はより幅広い。九州の亜種は他亜種より大型, 雄の翅表はより明るく, 雌雄とも翅裏面の地色は最も明るく, 同時期に混飛する春型のルリシジミと更に酷似するが, 後翅裏面1c室の2つの黒斑は結合して「く」の字状をなす傾向が強い。

分布: (県内) 矢部村御側, 星野村, 添田町障子岳, 築城町寒田, 犬ヶ岳

(県外) 北海道~九州。四国, 九州では一般に局所的で個体数も多くない。

(国外) 中国大陸中部, 朝鮮半島, 台湾

生活史・生態・生息地: 年1回, 九州中・南部の低山地では3月下旬~4月中旬が発生期。幼虫の食樹としてはトチノキ, キハダ, ミズキが知られており, 九州ではキハダが一般的な食樹。幼虫は食樹の蕾, 花, 幼果を主食とする。雄成虫は林縁, 伐採地, 林道, 溪流沿いでよく見かけ, 溪流沿いの岩や湿地で吸水することが多く, 集団吸水も見られる。雌雄とも, 訪花習性がある。生息地は, 九州ではキハダ, ミズキを混じえる暖帯常緑広葉樹林が中心である。地形的には, 山地から低山地の溪流, 溪谷沿いに産地が多く, 九州では標高200~500mぐらいが多い。

(矢田・森田・福田・新海)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

アイノミドリシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名: *Chrysozephyrus brilliantinus* (Staudinger, 1887)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1960年に英彦山の豊前坊において、1雄1雌が採集された。以後1961、62年に追加の雄雌、1962年から1978年にかけては少数ながら採卵記録がある。しかし、その後の報告はなく、確実な生存については情報がない。日本産蝶類県別レッドデータリストでは「絶滅危惧種」とされている。1997~1999年の調査でも再発見はできなかった。

分類・形態: 前翅長約21mm。翅表の地色は金属光沢のある黄緑色で、メスアカミドリシジミに酷似するが、翅表外縁黒帯はやや狭く、また、裏面の地色ははるかに暗色。九州をはじめ暖地の個体は北海道など寒冷地のものに比べてかなり大型となる。

分布: (県内) 英彦山地のみから知られる。

(県外) 北海道~九州。西南日本では一般に希少種となり、九州では、英彦山、祖母山、九重山、白岩山(宮崎)、紫尾山(鹿児島)などの高地帯のみから知られる。

(国外) 中国大陸(東北~中部)、ロシア極東地域、朝鮮半島

生活史・生態・生息地: ほかのミドリシジミ類と同様、年1回の発生。6月下旬~7、8月に出現し、雌の生き残りは10月まで見られる。幼虫の主な食樹は、ブナ科コナラ属のミズナラであるが、英彦山ではアカガシも確認されている。冷温帯の落葉広葉樹林がおもな生息地であるが、その下限や九州などの温暖地では落葉広葉樹林と常緑広葉樹林が連続的となる。

(矢田・景浦・小田切)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

エゾミドリシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名: *Favonius jezoensis* (Matsumura, 1915)

カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 1959年に英彦山の豊前坊で1雄が採集され、1962年まで雌を含む報告が続いた。1962年から冬季採卵が行われるようになり、1978年まで少数ながら報告がある。以後1995年豊前市経読林道で成虫、1996年添田町障子岳で1雄が採集された。日本産蝶類県別レッドデータリストでは「絶滅危惧種」とされている。

分類・形態: 本属唯一の日本固有種で、亜種の分割はされていない。前翅長約21mm。雄の後翅表外縁黒帯は幅広く、その幅は外縁中央部で特に狭くならない。前翅外縁はほぼ直線状で、外縁中央部においてややえぐられる。九州をはじめ暖地の個体は寒冷地のものに比べてかなり大型となる。

分布: (県内) 添田町の英彦山地および豊前市経読林道からのみ知られる。

(県外) 北海道~九州。西南日本では一般に希少種で、九州では、英彦山、祖母山、九重山、白岩山(宮崎)、紫尾山(鹿児島)などの高地帯のみ

生活史・生態・生息地: 年1回の発生。1月中旬~7月に出現し、雌は9月末まで見られる。幼虫の主な食樹は、ブナ科のミズナラであるが、英彦山ではアカガシが確認されている。その他、コナラ、クヌギ、カシワ、アベマキなどの落葉樹、ウラジロガシ、ツクバネガシなどの常緑樹からも卵が発見されている。成虫の訪花性は強く、シシウド、アカショウマ、ウツギ、クリなどが確認され、吸水も観察されている。温帯落葉広葉樹林がおもな生息地であり、ミズナラ林に多い。また、本種は渓谷、山腹斜面、雑木林など多様な環境に生息する。

(矢田・新海)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

ミヤマカラスシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名: *Satyrium mera* (Janson, 1877)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1928年に英彦山で採集されたのが最初の記録。その後1935年~1966年までは文献上の記録があるが、以後は採集情報もほとんどない。ただ、1984年頃に英彦山での未発表の採集記録がある。日本産蝶類県別レッドデータリストでは「絶滅危惧種」とされている。

分類・形態: 本属唯一の日本固有種で、亜種の分割はされていない。前翅長は約17mm(雄)~約20mm(雌)。カラスシジミに酷似するが、翅表の地色はより淡い茶褐色で、雄にある前翅中室端の楕円形性標はより大型で顕著、後翅の尾状突起はより長い。また、ゼフィルス類などと同様、九州、四国産の個体は、寒冷地のものに比べてより大型となり、裏面の地色はより暗色、白条はより明瞭となる。

分布: (県内) 添田町英彦山地のみから知られる。

(県外) 北海道~九州に産する。西南日本では一般に希少種となり、九州では、英彦山、祖母山、九重山、

内大臣(熊本)、白岩山、高千穂町(宮崎)などの高地帯のみ

生活史・生態・生息地: 年1回の発生。7~8月に出現し、雌の生き残りは9月まで見られる。幼虫の主な食樹は、クロウメモドキ科のクロウメモドキ、コバノクロウメモドキ、クロツバラなど。活動時間帯は正午すぎから夕方にかけてで、食樹などを含む灌木帯で占有行動が見られる。訪花習性が著しく、ヒメジョオン、ヒヨドリバナ、シシウド、オカトラノオ、クガイソウ、サラシナショウマ、アワモリショウマ、イタドリ、ノリウツギなど白色系の花でよく見られる。吸水、吸汁行動は観察されていない。温帯から暖帯の落葉広葉樹林が生息地である。カラスシジミと混棲する地域では、カラスシジミの方がより渓谷的、疎林的環境を好むのに対し、本種はより高原的、低木林的環境に好んで生息する。

(矢田・福田・景浦)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

クロシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名: *Niphanda fusca* (Bremer & Grey, 1852)

カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 1894年に英彦山で採集された記録が本県最初の記録とされる。1950~60年代は県内各地で普通の種として見られた。しかし、1980年代から減少しはじめ、また全国的にも本種の衰亡が深刻となった。このため採集による減少も懸念される。本種の生息地は人為による環境改変を受けやすく、県内でも生息環境の変化が衰亡の主要因と考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストにおいても「危急種」とされている。

分類・形態: 前翅長は約19mm(雄)~約21mm(雌)。裏面の地色が褐色のものと、著しく白化したタイプのもがあり、地域によってその出現の割合が異なる。県内では褐色系が多いが、白化系のものもしばしば現れる。

分布: (県内) 福岡市、前原市、那珂川町、北九州市八幡権現山、四王寺山、宝満山、筑紫野市(吉木、阿志岐)、高良山、花立山、筑後市、大牟田市、田

主丸町、浮羽町、英彦山、黒木町、瀬高町清水山など
(県外) 本州(東北地方中部以南)、四国、九州
(国外) 中国大陸(西・北部)、朝鮮半島

生活史・生態・生息地: 幼虫は純蜜食性で、1~2齢はアブラムシやキジラミの分泌液を吸汁する。2齢幼虫期にクロオオアリによって巣に運ばれ、アリから口移しで吐き戻した餌を給餌される。このアリとは相利共生的な食物関係があるようである。成虫の訪花植物はヒメジョオン、クララ、タチツボグサ、フジバカマ、ワレモコウ、アカメガシワなど。生息地は、クヌギ・コナラ・カシワなどの疎林、アキグミの生えた草地、マツ・ヒノキなどの幼木のある草地、クワ畑、ゴマ、オニユリなどの畑など、人手の加わった遷移的な環境である。また、アブラムシ、キジラミ類の多いこと、クロオオアリが生息していることも不可欠の生息条件となる。

(矢田・井手・福田)

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

シルビアシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Zizina otis* (Fabricius, 1787)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：1921年に福岡市南公園で採集された1雄が本県最初の記録。1950～60年代は福岡市、北九州市、あるいはその近郊で普通の種であり、南公園や能古島では多産したという。しかし、1972～74年福岡市南区柏原において多数生息していたものの、その後は減少が著しく、80年代には芥屋においての1雄採集記録のみで、90年代には正式の記録がなくなる。生息地は人為による環境改変を受けやすく、県内でも生息環境の変化が衰亡の主要因と考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストにおいても、「絶滅危惧種」とされている。1997～1999年の調査では、姫島で確認されたにすぎない。

分類・形態：本種は多数の亜種が知られており、日本産のものは本土産と、本土産よりはるかに小型で裏面斑紋の弱い南西諸島産の2亜種に分類される。前翅長は約11mm。ヤマトシジミに似るが、本種の後

翅裏面第6室基部の黒斑は内側にずれるために、中央黒斑列は完全な円弧とならない。

分布：（県内）福岡市、北九州市およびその近郊、久留米市、三井郡、浮羽郡など

（県外）本州（栃木県以南）～九州、南西諸島

（国外）インド・オーストラリア区およびアフリカ
生活史・生態・生息地：幼虫の食草として記録の多いのは、九州北部ではミヤコグサ、ヤハズソウ、コマツナギなどのマメ科。多化性で、越冬態は幼虫とされるが、詳細は不明。成虫は訪花性が強く、上記食草のほか、ヒメジョオン、キツネノマゴ、セイタカアワダチソウなどの訪花植物が知られる。雄は地表で吸水もする。生息地は、暖温帯の海岸近くや火山地帯の草原。人手の入った所では、河川の堤防、河川敷、土手、飛行場、墓地、田畑の畦など、食草の生える明るく丈の低いシバ草原に多い。

（矢田）

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

タイワンツバメシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Everes lacturnus* (Godart, [1824])

カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：1929年若杉山で2雄が採集されたのが本県最初の記録。1950～70年代前半までは若杉山、福岡市、久留米市などで局地的ながらしばしば多産した。しかし、1970年代後半から記録がなくなり、1991年に北九州市で1雌の採集記録があるが、ほとんど絶滅状態である。生息地は人為による環境改変を受けやすく、県内でも生息環境の変化が衰亡の主要因と考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストにおいても「絶滅危惧種」とされている。1997～1999年の調査でも再発見はできなかった。

分類・形態：多数の亜種が知られており、日本産のものは本土産と南西諸島以南産に分類され、研究者によっては、奄美・沖縄産も区別される。前翅長は約12mm。ツバメシジミに酷似するが、本種は後翅裏面の黒斑は、第7室の2個、中室内基部と内縁のそれぞれ1個、外縁肛角部付近の2個が黒色でよく目立つ

点などで区別される。

分布：（県内）福岡市（香椎、能古島）、若杉山、小郡市三沢、久留米市（草野町、高良内）、矢部村など

（県外）本州（和歌山県以南）、四国（高知県、愛媛県南部の海岸地帯）、九州および南西諸島

（国外）インド・オーストラリア区

生活史・生態・生息地：幼虫の食草は、九州本土以北ではマメ科のハイシバハギ。九州中・北部、四国では年1回、8月下旬～10月上旬に成虫が出現する。越冬幼虫は翌春も摂食せずに越冬し、8月終わりに羽化する。成虫は訪花性が強く、ヤハズソウ、マルバハギ、ネコハギ、シバハギ、メドハギなどの訪花植物が知られる。生息地は海岸付近から標高700m付近の暖帯・亜熱帯で、食草のシバハギ類の群落地とほぼ一致する。

（矢田・井手）

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

オオウラギンスジヒョウモン

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名 *Argyronome ruslana* (Motschulsky, 1866)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1893年に採集された記録が本県最初の記録。1930年代には、福岡市、北九州市などで多くの記録があり、その後も1970年代までは局地的ながら県内全域で連続的に記録があった。しかし1980年代からは正式の記録がほとんどない。本種が秋に移動してくる低地は人為による環境改変を受けやすく、生息環境の変化が衰亡の要因の一つと考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストにおいても「絶滅危惧種」とされている。1997～1999年の調査でも再発見はできなかった。

分類・形態：本種は亜種に分割されていない。前翅長は約30～35mm。雄翅表の地色は濃橙色、前翅表に黒色の発香鱗条がある。ウラギンスジヒョウモンとよく混同されるが、本種では前翅端の突出がより強く、翅形が横長となり、後翅裏面外半部の雲状部はより暗色となる。

分布：(県内)福岡市(西公園, 脊振山, 志賀島), 若杉山, 北九州市(足立山, 福智山), 求菩提山,

豊前市, 久留米市, 三井郡, 浮羽郡, 八女郡, 英彦山など

(県外)北海道～九州

(国外)ロシア極東地域, 中国大陸東北部, 朝鮮半島

生活史・生態・生息地：幼虫の食草は、スミレ科だが、特にタチツボスミレを好みマルバスミレは食べないという。年1化性で、越冬態は卵内の1齢幼虫あるいは孵化した1齢幼虫。九州では6月中旬から羽化する。成虫は訪花性が強く、ノアザミなどのアザミ類、ヤナギラン、マツムシソウ、クガイソウなどの赤紫色の花によく集まる。雄は吸水もする。生息地は、暖温帯～冷温帯まで広いが、寒冷地の方が多い。同属のウラギンスジヒョウモンよりもやや山地を好み、日当たりのよい草原や森林内の空地、河辺林周辺に見られる。

(矢田)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

オオウラギンヒョウモン

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Fabriciana nerippe* (C. & R. Felder, 1862)

カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由：1893年に採集された記録が本県最初の記録。1930～40年代には多くの記録があり、その後も1970年代までは県内全域で連続的に記録があった。しかし、1978年からは産地は北九州市の平尾台のみとなり、1990年代からはその記録もなくなった。本種の本来の生息地が低地のシバ草原など人為による環境改変を受けやすい場所であったこと、また、夏眠場所の破壊や吸蜜植物の衰亡などが相乗的に影響して、著しく衰亡したものと考えられる。1997～1999年の調査でも再発見はできなかった。

分類・形態：亜種に分割されていない。前翅長は約33mm(雄)～約39mm(雌)。雄翅表の地色は濃橙色、前翅表に黒色の発香鱗条がある。雌は雄より大型、翅表の地色は雄より暗色、黒斑は雄に比べてはるかに大きい。

分布：(県内)福岡市(東公園, 志賀島), 若杉山, 久留米市(草野町, 高良山), 北九州市(皿倉山,

福智山, 平尾台), 花立山, 朝倉郡, 浮羽郡, 大牟田市, 星野村, 英彦山, 築上郡, 豊前市など

(県外)本州～九州

(国外)ロシア極東地域, 中国大陸, 朝鮮半島

生活史・生態・生息地：幼虫の食草は各種のスミレ科で、特にスミレを好む。年1化性で、越冬態は孵化してまだ摂食していない1齢幼虫。九州など温暖な地域では5月下旬から羽化する。九州の山地では、雄のピークは6月だが、雌は7月上旬で、約半月のずれがある。成虫は訪花性が強く、ノアザミなどのアザミ類、オカトラノオ、ヒヨドリバナなどの花によく集まる。生息地は、暖温帯～冷温帯まで広いが、暖地の方が多い。西日本では平地～低地に多く、高標高で見るとはまれである。スキー場、古墳、飛行場、河川敷や堤防などいわゆるシバ草原が主な生息地となる。

(矢田・福田)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

ホシミスジ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名: *Neptis pryeri* (Butler, 1871)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1902年に英彦山において採集されたのが最初の確実な記録である。その後、1948年同地で採集され、1950年代まで少数ながら記録があった。しかし、その後は正式の記録は全くなく、1970年に未確認の採集情報があるだけである。日本産蝶類県別レッドデータリストでも、「絶滅危惧種」とされている。1997~1999年の調査でも再発見はできなかった。

分類・形態: 前翅長は約28mm。雌雄の斑紋上の違いがほとんどないが、雌は一般により大型で翅形（前翅外縁）の丸味がより強い。

分布: (県内) 英彦山地のみから知られる。
(県外) 本州（東北地方はまれ）、四国、九州（西・南部を除く）
(国外) ロシア極東地域、中国、朝鮮半島、台湾

生活史・生態・生息地: 西日本の低地帯では年2~3化性で、成虫は5~10月に見かける。幼虫の主な食樹は、バラ科のシモツケ属で、シモツケやユキヤナギなどが知られている。成虫は訪花習性が著しく、イボタノキ、リョウブ、ウツギ、シモツケ、シシウド、オカトラノオなどを訪れる。雄は吸水（まれに雌も）、吸汁行動が観察されている。温帯から冷温帯の落葉広葉樹林の林縁や明るい疎林などが本来の生息地である。生息地は、本種の場合は山間の露岩地、火山のすそ野や火口原などのような環境を好む傾向がある。人為的な環境にもよく適応し、人家の庭に植栽されたシモツケ属の栽培植物にしばしば発生する。

(矢田・佐々木)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

キマダラモドキ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae (ジャノメチョウ科)

学名: *Kirinia fentoni* (Butler, 1877)

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 1901年英彦山神社で採集されたのが本県最初の記録。その後、若杉山の産地が発見され、1960年代までは県内で少ないながら記録があった。特に若杉山は多産することもあったという。しかし、1970年代には全く記録がなくなり、目撃の報告もない。クヌギ林など本種の生息地は人為による環境改変を受けやすく、これが衰亡の主要因と考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストにおいても「絶滅危惧種」とされている。1997~1999年の調査でも再発見はできなかった。

分類・形態: 前翅長は約28mm。雌雄の区別は困難であるが、雄翅表の地色は黄褐色で黄色斑は不鮮明。雌の地色は淡く黄色斑がよく発達する。一見キマダラヒカゲ属やヒメキマダラヒカゲに似るが、翅形は丸く、表裏とも斑紋は独特で区別は容易。

分布: (県内) 若杉山、福智山、田主丸町、熊渡山、

英彦山

(県外) 北海道(西南部)~九州(北部)

(国外) ロシア極東地域、中国東北部、朝鮮半島

生活史・生態・生息地: 幼虫の食草は、イネ科のススキ、カモジグサ、ヒメノガリヤスなど、カヤツリグサ科のヒゴクサ、ヒカゲスゲ、カサスゲ、テキリスゲなどの各種禾本科植物。普通年1回の発生。成虫は好んで樹液を吸汁し、特にクヌギの樹液を好む。また、獣糞や腐果なども吸汁するが、訪花習性はない。生息地は、温帯から冷温帯のカシワ、クヌギなどの落葉広葉樹林周辺の草地、あるいは低山地の湿地を交えた樹林などが普通。クロヒカゲモドキなどと混棲することが多いが、より明るい疎林的环境を好む。県内の産地にはいずれも、クヌギ、コナラ、アラカシの二次林の群落がまとまってあった。

(矢田)

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

ヒカゲチョウ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae (ジャノメチョウ科)

学名：*Lethe sicelis* (Hewitson, [1862])

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：1890年英彦山で採集されたのが本県最初の記録である。本種は1960年代までは普通種で、平地から低山地にかけてしばしば多産するチョウであった。しかし、その後、記録が急減し、1992年の北九州市足立山での記録を最後に現在ほぼ絶滅状態にある。県内の産地はいずれも、クヌギ、コナラの二次林が中心であったが、これらの生息地は人為による環境変化を受けやすく、これが本種の衰亡の主要因と考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストにおいても「絶滅危惧種」とされている。1997～1999年の調査でも再発見はできなかった。

分類・形態：亜種は知られていない。前翅長は約31mm。クロヒカゲと酷似するが、地色がより淡色であり、後翅裏面の眼状紋列内側の暗色条が外方に向かって強く突出しない。

分布：(県内) 福岡市（南公園、平尾、香椎）、太宰府市、古賀市、久山町、新宮町、宇美町、須恵町、

若杉山、高良山、北九州市（皿倉山、小倉、福智山、平尾台）、花立山、朝倉郡、浮羽郡、大牟田市、矢部村（日向神～釈迦岳）、英彦山、築上郡、豊前市など

(県外) 本州、四国、九州（日本固有種）

生活史・生態・生息地：幼虫の食草は、イネ科のゴキダケ、メダケ、アズマネザサ、ミヤコザサ、クマザサ、チシマザサ、マダケなど。普通年2回の発生で、福岡の平地では第1化が5～6月、第2化が8～9月である。成虫は好んで樹液を吸汁し、特にクリ、クヌギ、コナラ、ヤナギ、タブノキなどの樹液を好む。また、死体や獣糞、腐果なども吸汁する。訪花習性は弱い。本来はミヤコザサ、チシマザサなどを林床にもつミズナラの原生林に生息したが、アズマネザサなどを林床にもつクヌギ、コナラの二次林が形成されるとともに生息地を拡大したと推測されている。

(矢田・福田)

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

クロヒカゲモドキ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae (ジャノメチョウ科)

学名：*Lethe marginalis* (Motschulsky, 1860)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：1926年久留米市高良山で採集されたのが本県最初の記録である。その後、同じ産地で1959年まで少数ながら採集記録があった。また、1963年大牟田市三池山で1雌が得られて以来、1960年代までは福岡県内で少ないながら記録があった。しかし、主産地であった高良山の生息地の環境変化により全く見られなくなってしまった。日本産蝶類県別レッドデータリストにおいても「絶滅危惧種」とされている。1997～1999年の調査でも再発見はできなかった。

分類・形態：前翅長は約31mm。雌雄の区別は困難であるが、雌は雄に比べて、翅形が幅広く、地色は淡く、また前翅の斜白帯はより明瞭である。一見クロヒカゲ、ヒカゲチョウに似るが、翅形はより丸みを帯びること、裏面の眼状紋は大きく明瞭で、また前翅の第3～5室の3個の眼状紋は下から上へ順次小さくなることなどから容易に区別できる。

分布：(県内) 高良山、三池山

(県外) 本州～九州

(国外) ロシア極東地域、中国、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：幼虫の食草は、イネ科のノガリヤス、ヒメノガリヤス、オオアブラススキ、チヂミザサなど、カヤツリグサ科のアイバソウなどの各種禾本科植物。年1回の発生で6月下旬～7月中旬に羽化する。成虫は好んで樹液を吸汁し、特にコナラ、クヌギ、フサザクラなどの樹液を好む。また、死体や獣糞、腐果なども吸汁する。訪花習性は知られていない。生息地は、暖温帯林の特にクヌギ、コナラなどからなる二次林の林縁やイネ科の多い疎林が多い。しばしばキマダラモドキと混棲するが、本種の方がより陰地性で、明るい草原に進出することはない。

(矢田・福田)

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

オオチャバネヨトウ

チョウ目 ヤガ科 Noctuidae カラスヨトウ亜科 Amphipyrinae

学名：*Nonagria puengeleri* (Schawerda, 1923)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：本種の主要な生息地である平地のヨシ、ガマなどが繁茂している、ため池、湿地帯が減少しつつあり、採集記録も近年見られなくなった。このような環境がハイイロボクトウと同じく、池の改修工事により激減しているもので、個体数の減少につながっていると推測される。**分類・形態**：前翅長17mm(雄)～20mm(雌)。前翅表面の地色は暗褐色、翅脈上に黒色の鱗粉が薄くのり、特に中室下方の翅脈では太い黒色の帯状斑紋が形成される。中室端に小型だが明瞭な白色斑がある。後翅表面は明るい白色。薄い黒色の外縁線が、翅頂部からCuA2まで伸びる。雌は雄より大型、さらに腹部が伸張する。(雌雄の区別は後翅基部の翅棘の本数は雄が太くて1本、雌は細くて複数というのがヤガ

一般の形質状態なので、これを裏面から見るのがもっとも簡単。)

分布：(県内)北九州市、福岡市および大牟田市
(県外)北海道～九州

(国外)ロシア沿海州、イラク

生活史・生態・生息地：食草はガマ科のガマが知られている。幼虫は食草の茎の部分にもぐるいわゆる穿孔虫 *borer* である。年1化で6月～8月に出現。幼虫は茎の中心付近を食し、茎の下方へ進んだ個体は、水面下まで達するという。蛹化は茎の中で行われる。成虫は雌の方が灯りに多く飛来する。生息地は食草のガマが繁茂する平地のため池や湿地帯。

(上田・佐々木)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ミヤマセセリ

チョウ目 セセリチョウ科 HesperIIDae

学名：*Erynnis montanus* (Bremer, 1861)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1902年に北九州市で採集された記録が本県最初の記録である。その後、福岡市、北九州市、久留米市をはじめ、県内各地で見られる種であった。しかし、1980年代後半から公式の記録が急減し、特に福岡市など都市部ではほぼ絶滅状態にある。本種の生息地であるクヌギ、コナラの二次林は人為による環境変化を受けやすく、これが本種の衰亡の主要因と考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約18mm。

分布：(県内)福岡市(南公園、平尾、油山、能古島、香椎、立花山、曲淵、南畑ダム、水無、脊振山、

金山)、四王寺山、宝満山、筑紫野市、若杉山、犬鳴山、高良山、北九州市(八幡、大谷、小倉、足立山)、花立山、浮羽郡、三池山、星野村、矢部村、英彦山、築上郡、豊前市など

(県外)北海道～九州

(国外)ロシア極東地域、中国、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：年1回、3～4月に発生する。幼虫の食草はブナ科のコナラ、クヌギ、カシワなど。終齢幼虫で越冬する。成虫はスミレ類(タチツボスミレ)やキイチゴ(ナガバキイチゴ)などを訪花する。生息地は低山地のクヌギ、コナラの二次林周辺。

(矢田・福田)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ヒメキマダラセセリ

チョウ目 セセリチョウ科 HesperIIDae

学名：*Ochlodes ochraceus* (Bremer, 1861)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1901年に英彦山で採集された記録が本県最初の記録である。その後、福岡市、北九州市、久留米市をはじめ、福岡県下に普通に見られた。しかし、特に福岡市など都市部では急速に減少している。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：雌雄差が著しく、雌は地色が暗褐色で中央黄斑列が明瞭となる。前翅長は約13mm。

分布：（県内）福岡市（平尾、油山、石釜、椎原、金武）、前原市火山、宝満山、天拝山、四王寺山、若杉山、犬鳴山、京都郡、高良山、北九州市（山田緑地、八幡、花尾山、鷲峰山、足立山、福智山）、

花立山、浮羽郡、三池山、星野村、矢部村、英彦山など

（県外）北海道（まれ）～九州

（国外）ロシア極東地域、中国東北部、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：年2回、5～9月に発生する。幼虫の食草はイネ科のチヂミザサ、アシボソ、マコモジグサ、カヤツリグサ科のミヤマシラスゲ。終齢幼虫で越冬する。生息地は低山地～山地の疎林、樹林の周辺、谷間など。やや湿った木陰の多い場所を好む。

（矢田・福田）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ミヤマチャバネセセリ

チョウ目 セセリチョウ科 HesperIIDae

学名：*Pelopidas jansonis* (Butler, 1878)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1901年に英彦山で採集された記録が本県最初の記録である。その後、県内に局地的ながら普通に見られた。しかし、1980年代から公式の記録が急減し、とくに福岡市など都市部ではほぼ絶滅状態にある。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「希少種」とされている。**分類・形態**：オオチャバネセセリに似るが、後翅裏面の中室内に大型の銀斑をあらわすので識別は容易。前翅長は約17mm。

分布：（県内）福岡市（南公園、平尾、油山、柏原）、宝満山、若杉山、犬鳴山、高良山、甘木市、

北九州市（皿倉山、八幡、福智山）、星野村、矢部村、香春町、英彦山など

（県外）本州、四国、九州

（国外）中国（東北部）、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：年2回、4～8月に発生する。幼虫の食草はイネ科のススキの他、チガヤ、ヒメノガリヤス、ヨシなど。訪花、吸水、ならびに小動物の死体、獣糞などで吸汁する。蛹で越冬する。生息地は低地～山地の溪流沿いや林縁の草地。

（矢田）

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

ツマグロキチョウ

チョウ目 シロチョウ科 Pieridae

学名: *Eurema laeta* (Boisduval, 1836)

カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 1902年に北九州市で採集された記録が本県最初の記録である。1950～70年代は県内全域で普通に見られ、たとえば福岡市内の空き地、河川敷などでしばしば豊産した。しかし、1980年代から明らかに減少しはじめ、90年代には正式の記録が急減した。食草であるカワラケツメいの壊滅的減少と本種の衰亡は連動しているようである。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされているし、2000年3月公表の環境庁レッドデータリストでは、一挙に絶滅危惧Ⅱ類としてランク入りし、全国的な衰亡が顕著な種として注目されている。

分類・形態: キチョウと紛らわしい場合があるが、前翅裏面基部の雄性標は楕円状で桃色であること、後翅裏面の黒条が2本の平行条となること、などにより容易に区別できる。前翅長は約19mm(夏型)～21mm(秋型)。

分布: (県内) 福岡市、北九州市およびその近郊から久留米市、英彦山、矢部村など県内全域から記録がある。

(県外) 本州(宮城県以南)、四国、九州および南西諸島。ただし、南西諸島では秋型のみ少数得られており、移動個体と考えられている。

(国外) 中国、朝鮮半島、インド・オーストラリア区(ただし熱帯降雨林地帯を除く)

生活史・生態・生息地: 幼虫の食草はマメ科のカワラケツメイ。成虫は訪花習性が著しく、マメ科、カタバミ科、キク科、スミレ科など多数の訪花植物が報告されている。雄には吸水行動も見られるが、キチョウのように獣糞などへの吸汁は見られない。多化性成虫越冬で、季節的変異(夏・秋型)が著しい。空き地、河原など開けた環境を好む。

(矢田)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

エゾスジグロシロチョウ

チョウ目 シロチョウ科 Pieridae

学名: *Pieris napi* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1953年に北九州市小倉南区道原で採集された記録が本県最初の記録である。その後、局地的ながら、県内に産地が点在し、多産することもあった。しかし、1980年代から公式の記録が急減し、とくに棚田のスズシロソウを発生地とする産地ではほぼ絶滅状態にある。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態: スジグロシロチョウと酷似するが、春型では、後翅裏面の翅脈に沿った黒条が太くなり肩脈が不明瞭となること、夏型雄では前翅表第3室の小円斑が丸くなって前後の脈と離れる傾向にあるこ

と、などにより識別される。前翅長は約21mm。

分布: (県内) 天拝山、甘木市寺内ダム、瀬高町、高良山、古処山、星野村、矢部村、嘉穂町千手、香春町、平尾台など

(県外) 北海道、本州、四国、九州

(国外) ユーラシア大陸および北米大陸

生活史・生態・生息地: 年2～4回、3～10月に発生する。幼虫の食草はアブラナ科のタネツケバナ、コンロンソウ、スズシロソウなど。蛹(休眠蛹)で越冬する。生息地は低山地～山地の疎林内や林縁。訪花性が強いが、吸水もよく見かける。

(矢田・川上)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ウラゴマダラシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Artopoetes pryeri* (Murray, 1873)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1946年に添田町の英彦山の銅の鳥居付近で採集されたのが最初の記録である。その後、英彦山地では少数ながら連続的に記録がある。1987年に小石原村で、また1990年に築城町でそれぞれ発見されている。しかし、全体的には、個体数、産地とも縮小傾向にある。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「希少種」とされている。

分類・形態：雌は雄より大型で、翅表のうす紫色部に白斑が発達する。前翅長は約20～23mm。

分布：（県内）小石原村，田川郡英彦山山系，築城町

（県外）北海道～九州

（国外）ロシア極東地域，中国（東北部），朝鮮半島

生活史・生態・生息地：幼虫の食樹はモクセイ科のイボタ，ミヤマイボタなどで，まれにハシドイやネズミモチも利用される。母チョウは枝の分岐部などに数個～数十個卵塊で産下する。卵越冬年1化性で，福岡の低地では5月中旬から6月に発生する。ゼフィルス類の中では訪花性が強く，クリ，イボタ，ノリウツギなど白い花をよく訪れる。暖温帯から冷温帯にかけての落葉広葉樹の優先する溪谷沿いに多い。林縁や林内空地のような，背景に樹林のある明るい環境も好む。

（矢田・川上）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ミズイロオナガシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Antigius attilia* (Bremer, 1861)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1935年に志賀島および南公園で採集されたのが最初の記録である。その後、県内各地で採集報告がなされてきた。最近でも少しずつ報告はあるが，明らかに個体数・産地の数は減少している。1991年以降の正式の記録は少ない。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約17mm。

分布：（県内）福岡市（南公園，立花山，志賀島，能古島，香椎，六本松護国神社），糸島郡，太宰府市，犬鳴山，北九州市（妙見，足立山，平尾台），三井郡，豊前市，築上郡，英彦山，久留米市，宗像市，篠栗町など

（県外）北海道～九州

（国外）ロシア極東地域，モンゴル，中国，朝鮮半

島，台湾

生活史・生態・生息地：幼虫の食樹はコナラ亜属のクヌギ，コナラなど。卵越冬で，福岡の低地では6月上旬～7月上旬に発生する。暖温帯と冷温帯の落葉広葉樹林帯が主な生息地。福岡市では，クヌギ，コナラがあれば照葉樹林帯にも見かける。また，常緑のアカガシ亜属も食樹とされることがあるという。糸島郡ではヒメジョオンに訪花，葉上に付着したアブラムシの分泌物を吸うのを観察した。二次林から原生林までのさまざまな植生段階に広く適応するが，低山地や丘陵地の二次林に最も優勢である。平地から山地まであらゆる地形の森林帯に生息する。

（矢田・福田）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

アカシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Japonica lutea* (Hewitson, [1865])

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1926年に福岡市の平尾浄水池（現在の南公園）および太宰府市において採集されたのが最初の記録である。その後、県内各地で少数ながら採集報告がなされてきた。しかし、1991年の北九州市、福岡市などの記録の後、急速に減少しているようで、正式の報告はほとんどない。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約18mm。

分布：（県内）福岡市（南公園、油山）、四王寺山、筑紫野市山神ダム上方、那珂川町南畑ダム上方、宝満山、久留米市、小郡市、宗像市、篠栗町、犬鳴山、

北九州市尺岳、三井郡、豊前市、築上郡、英彦山など（県外）北海道～九州

（国外）ロシア極東地域、中国東北・西部からチベット、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：幼虫の食樹はコナラ亜属のクヌギ、コナラなど。卵越冬で、福岡の低地では5月中旬～6月に発生する。暖温帯と冷温帯の中間にあるいわゆる中間温帯が主な生息地。特にコナラ亜属の優先する樹林に多い。二次林から原生林までのさまざまな植生段階に広く適応し、平地から山地まであらゆる地形の森林帯に生息する。

（矢田・溝部・小田切）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

コツバメ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Callophrys ferrea* (Butler, 1866)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1902年に英彦山で採集された記録が本県最初の記録である。その後、県内で広く普通に見られた。しかし、1980年代から公式の記録が急減し、特に福岡市など都市部ではほぼ絶滅状態にある。本種の生息地であるクヌギ、コナラの二次林は人為による環境改変を受けやすく、これが衰亡の主要因と考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約14mm。

分布：（県内）福岡市（南公園、平尾、油山、飯盛、

今宿、立花山、脊振山）、若杉山、高良山、北九州市（山田緑地、小倉、足立山）、宝満山、花立山、浮羽郡、三池山、星野村、矢部村、英彦山など

（県外）北海道～九州

（国外）ロシア極東地域、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：年1回、3～5月に発生する。幼虫の食草はツツジ科のアセビ、ナツハゼ、シヤクナゲなど。生息地は低山地～山地の落葉広葉樹周辺のブッシュ。

（矢田・福田）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

クロツバメシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Tongeia fischeri* (Eversmann, 1843)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：1955年に糟屋郡相島で採集された記録が本県最初の記録とされる。その後、津屋崎町、沖ノ島、芥屋など海岸沿いで採集され、また1967年には矢部村の日向神でいわゆる内陸型の産地が発見されたが、1980年代になって報告が急減している。1990年の再調査によると、芥屋と新宮町のみからわずかに見いだされたという。開発による海岸環境の変化が衰亡の主な原因と思われる。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約21mm。

分布：（県内）福岡市、北九州市（柄杓田）およびその近郊

（県外）本州（新潟南部、群馬以西）～九州北・中部

（国外）ロシアシベリア中部から極東地域、モンゴル、中国東北部、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：幼虫の食草は、ベンケイソウ科のツメレンゲ、イワレンゲ、マンネングサ、タイトゴメ（福岡市玄界島、糸島郡芥屋）など。年3～5回、4月下旬～11月に発生する。2～5齢幼虫で越冬する。成虫は訪花性が強く、ベンケイソウ科のほか各種の花を好む。生息地は、食草のある海岸、低地～山地の川原、崖、人家の石垣などの開けた環境である。

（矢田・福田）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

コムラサキ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Apatura metis* Freyer, [1829]

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1890年に英彦山で採集報告がある。その後、県内でごく普通に見られた。しかし、1980年代に入ってから公式の記録が急減し、特に福岡市など都市部では著しい。本種の生息地であるヤナギのある水辺環境が減少し、またその樹液が成虫の餌となるクヌギ、コナラ類の伐採が衰亡の主要因と考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約32mm(雄)～約37mm(雌)。

分布：（県内）福岡市、北九州市、太宰府市、久留米市、大牟田市、浮羽郡、矢部村、英彦山、豊前市

など

（県外）北海道～九州

（国外）ユーラシア大陸北部

生活史・生態・生息地：福岡など暖地では普通年3回、5～9月に発生する。幼虫の食草はヤナギ科のヤナギ属、ヤマナラシ属。幼虫で越冬するが、3齢を中心に2～4齢の様々なステージで越冬する。生息地は平地～低山地の河川沿いのヤナギ類のある水辺環境。都市の公園や街路樹のシダレヤナギにも発生することがある。

（矢田）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

オオムラサキ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Sasakia charonda* (Hewitson, 1863)

カテゴリー：準絶滅危惧（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：1890年に英彦山で採集報告がある。その後、英彦山からの記録が多いが、北九州市や久留米市など都市周辺でも記録がある。しかし、1980年代から公式の記録が急減し、都市部周辺の産地はほぼ絶滅状態にある。本種の生息地であるクヌギ、コナラの二次林は人為による環境改変を受けやすく、これが衰亡の主要因と考えられる。日本産蝶類別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約48mm(雄)～約58mm(雌)。

分布：(県内)北九州市(皿倉山, 八幡西区, 頂吉,

福智山), 久留米市, 甘木市(秋月, 佐田), 浮羽町, 小石原村, 黒木町, 熊渡山, 矢部村日向神・御側, 豊前市, 犬ヶ岳など

(県外)北海道～九州

(国外)中国, 朝鮮半島, 台湾

生活史・生態・生息地：年1回, 6月中～下旬から発生し8月まで。幼虫の食草はニレ科のエノキ, エゾエノキなど。成虫はクヌギなどの樹液を好み, 獣糞や死体, 腐果も吸汁する。生息地は丘陵地のクヌギ, コナラの二次林周辺。

(矢田・福田)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ウラギンヒョウモン

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Fabriciana adippe* ([Denis & Schiffermüller], 1775)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1902年に北九州(企救郡)で採集された記録が本県最初の記録である。その後、県内に普通に見られた。しかし、1980年代から公式の記録が急減し、特に福岡市など都市部ではその記録もほとんどなくなった。日本産蝶類別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約29mm。

分布：(県内)福岡市(南公園, 平尾, 地行東町, 立花山, 志賀島, 脊振山, 金山), 若杉山, 春日市, 宝満山, 花立山, 高良山, 古処山, 北九州市(八幡, 福智山, 平尾台), 矢部村, 星野村, 英彦山, 豊前市, 求菩提山など

(県外)北海道～九州

(国外)ヨーロッパ, 中央アジア, シベリア, 中国西部

生活史・生態・生息地：幼虫の食草はスミレ, タチツボスミレなど各種のスミレ科。年1化性で, 越冬態は卵内の1齢幼虫または孵化してまだ摂食していない1齢幼虫。九州など温暖な地域では5月下旬から羽化し, 夏眠ののち, 9月中旬～10月上旬にかけて活動が再開され産卵する。成虫は訪花性が強く, ノアザミなどのアザミ類, タムラソウ, ヒョドリバナ, ネズミモチなどの花によく集まる。生息地は暖温帯～冷温帯まで広いが, やや寒冷地あるいは山地の草原に多い。

(矢田・福田)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ウラギンスジヒョウモン

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Argyronome laodice* (Pallas, 1771)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1893年に長野菊次郎氏が筑前（福岡県）で採集された記録が本県最初の記録といえる（長野，1893）。1930～40年代には、福岡市、北九州市、久留米市、英彦山、八女郡など全県内で多くの記録があり、その後も1970年代までは福岡全県内で連続的に記録があった。しかし、1970年代後半から報告が急減し、1990年代からはその記録もほとんどなくなった。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約26mm(雄)～約31mm(雌)。

分布：(県内)福岡市(南公園, 平尾, 香椎, 油山, 能古島, 脊振山), 若杉山, 宝満山, 花立山, 高良山, 大牟田市, 古処山, 北九州市(八幡, 福智山,

平尾台), 浮羽郡, 瀬高町, 矢部村, 星野村, 英彦山, 豊前市など

(県外)北海道～九州

(国外)ユーラシア大陸中部から北部

生活史・生態・生息地：幼虫の食草はスミレ、タチツボスミレなど各種のスミレ科。年1化性。九州など温暖な地域では5月下旬から羽化し、夏眠ののち、9月中旬～10月上旬にかけて活動が再開され、産卵する。成虫は訪花性が強く、ノアザミなどのアザミ類、タムラソウ、ヒョドリバナなどの花によく集まる。生息地は、純然たる草原より低山地の疎林、林縁、河辺林周辺の草原。

(矢田)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

クモガタヒョウモン

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Nephargynnis anadyomene* (C.& R. Felder, 1862)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1902年に北九州(企救郡)で採集された記録が本県最初の記録である。1930～40年代には、県内各地で多くの記録があった。しかし、1970年代から報告が急減し、1990年代からはその記録もほとんどなくなった。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約36mm(雄)～約39mm(雌)。

分布：(県内)福岡市(油山, 立花山, 脊振山), 若杉山, 犬鳴山, 宝満山, 四王寺山, 花立山, 高良山, 北九州市(皿倉山, 八幡, 福智山, 足立山, 平尾台), 浮羽郡, 星野村, 英彦山, 求菩提山, 豊前市など

(県外)北海道～九州

(国外)ロシア極東地域, 中国東部・東北部, 朝鮮半島

生活史・生態・生息地：幼虫の食草はタチツボスミレ、ノジスミレなど各種のスミレ科。年1化性。九州など温暖な地域では5月上・中旬から羽化し、夏眠ののち、9月中旬～10月上旬にかけて活動が再開され産卵する。成虫は訪花性が強く、ノアザミなどのアザミ類、ハンゴンソウ、ヒョドリバナ、ウツギなどの花によく集まる。生息地は、丘陵地から山地の落葉広葉樹の林縁、路傍、溪流沿いなどで、草原ではまれにしか見かけない。

(矢田)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

メスグロヒョウモン

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Damora sagana* (Doubleday, [1847])

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1893年に採集された記録が本県最初の記録といえる。1930～60年代には、県内各地で多くの記録があり、その後も1970年代までは連続的に記録があった。しかし、1970年代から報告が急減し、1980年代からはその記録もほとんどなくなった。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約33mm(雄)～約37mm(雌)。

分布：(県内) 福岡市(南公園, 平尾, 西公園, 立花山, 能古島, 香椎, 志賀島, 脊振山, 金山), 二丈町, 若杉山, 犬鳴山, 宝満山, 花立山, 高良山, 浮羽郡, 北九州市(皿倉山, 八幡, 妙見山, 石峯山, 福智山, 足立山, 企救), 広川町, 英彦山, 豊前市

など

(県外) 北海道～九州

(国外) ヨーロッパ, 中央アジア, シベリア, 中国西部

生活史・生態・生息地：幼虫の食草はタチツボスミレ, ツボスミレなど各種のスミレ科。年1化性。九州など温暖な地域では6月上旬から羽化し, 夏眠ののち, 9月中旬～11月上旬にかけて活動が再開され産卵する。成虫は訪花性が強く, ウツギ, クリ, オカトラノオ, アザミ類などの花によく集まる。生息地は, 丘陵地から山地の樹林の周辺, 林間の空地, 疎林などで, 開けた草原ではまれにしか見かけない。

(矢田)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ジャノメチョウ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Minois dryas* (Scopoli, 1763)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1890年に英彦山で採集報告がある。1930～60年代には、県内各地で多くの記録があった。しかし、1970年代後半から報告が急減し、1990年代からはその記録もほとんどなくなった。生息地である人為的に長期間維持された明るい草原(シバ草原)の減少が本種の衰亡と関係が深いと考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約30mm(雄)～約33mm(雌)。

分布：(県内) 福岡市(南公園, 平尾, 西公園, 金山), 大根地山, 四王寺山, 宝満山, 瀬高町, 若杉山, 久留米市, 三輪町, 夜須町, 小石原村, 北九州市(皿倉山, 八幡, 福智山, 足立山, 花尾山, 平尾

台), 花立山, 耳納山, 三池山, 英彦山, 求菩提山, 豊前市など

(県外) 北海道～九州(対馬を含む)

(国外) ヨーロッパから東アジア

生活史・生態・生息地：幼虫の食草はイネ科のススキ, スズメノカタビラ, カヤツリグサ科のヒカゲスゲなど。年1化性で, 越冬態は1～3齢幼虫。年1回, 7～8月に発生し, 9月まで見られる。成虫は訪花性が強く, ノアザミなどのアザミ類, マツムシソウ, クガイソウ, ウツボグサなどの花によく集まる。生息地は, 平地～山地のススキやチガヤを主体とした明るいシバ草原。

(矢田)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ウラナミジャノメ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Ypthima motschulskyi* (Butler & Grey, 1852)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：1902年に英彦山で採集された記録が本県最初の記録である。1930～60年代には、県内各地で多くの記録があった。しかし、1970年代から報告が減少しはじめ、1990年代からはその記録もほとんどなくなった。生息地である人為的に攪乱のある草原の減少が本種の衰亡と関係が深いと考えられる。日本産蝶類県別レッドデータリストでも「危急種」とされている。

分類・形態：前翅長は約20mm。

分布：(県内) 福岡市（平尾、油山、能古島、志賀島、立花山、金山）、宝満山、若杉山、高良山、三輪町、夜須町、小石原村、北九州市（皿倉山、八幡、福智山、足立山、花尾山、平尾台）、花立山、耳納

山、三池山、英彦山、求菩提山、豊前市など
(県外) 本州（神奈川県以西）～九州（対馬を含む）

(国外) 中国、朝鮮半島、台湾

生活史・生態・生息地：幼虫の食草はイネ科のアシボソ、ヒメシバ、チヂミザサなど。年2回、6～7月、8～9月に発生し、時に年3回発生する。越冬態は3～4齢幼虫。オカトラノオ、ツルボ、ヒメジョオンなどへの訪花例があるが、訪花性はそれほど強くない。生息地は、平地～低山地の林縁付近の草地で、ヒメウラナミジャノメと混棲するが、本種の方がより明るい環境を好む傾向がある。

(矢田)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ハイイロボクトウ

チョウ目 ボクトウガ科 Cossidae

学名：*Phragmataecia castaneae* (Hübner, 1790)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：本種の主要な生息地である平地のヨシなどが繁茂しているため池、湿地帯が減少しつつあり、採集記録も近年見られなくなった。このような環境が池の改修工事（コンクリートによる三面張り）により激減しているため、個体数の減少につながっていると推測される。幼生期が3年にわたる長期であることも回復が困難な原因かもしれない。もともと個体数の多い種類ではなく、北九州市の折尾、香月に散発的に記録があるのみである。

分類・形態：前翅長は13mm(雄)～17mm(雌)。前翅表面の地色は淡黄色、翅全体に暗褐色の細かな斑点がちりばめられるが、飛び古した個体ではしばしば不明瞭。後翅は光沢のある白色。わずかに暗褐色の細かな斑点が見られる。翅を閉じてヨシの枯れた葉や茎に静止していると保護色となり見分けにくい。雄

は一般に雌より小型で、触角の櫛歯状の構造が雌より長いので簡単に見分けられる。

分布：(県内) 北九州市

(県外) 北海道～九州

(国外) ヨーロッパ、東シベリア、中国、台湾、インド、イスラエル、アフリカ、マダガスカル

生活史・生態・生息地：食草としてはイネ科のヨシ、ダンチク類、サトウキビ類（インド）。卵は葉鞘部に産卵される。幼虫は食草の茎の部分にもぐりいわゆる borer である。英国では老熟するまで約21カ月かかることが知られており、3年目の5月から7月にかけて羽化する。年1化。雄は明かりによく飛来するが、雌はあまり来ない。生息地は食草のヨシが広がる平地のため池や湿地帯である。

(上田・佐々木)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

オオミノガ

チョウ目 ミノガ科 Psychidae

学名: *Eumeta variegata* (Snellen, 1879)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 市街地の街路樹の害虫としてその被害がしばしば問題になるような昆虫であったが、近年ヤドリバエの一種による寄生のため全国的にほぼ壊滅状態となった。本種の場合そのミノが秋から冬にかけての季節の風物詩的な役割もはたしてきたし、身の回りのなじみ深い虫のひとつなので今回選定した。

分類・形態: 成虫は雄が有翅、前翅長16mm、前翅の地色は暗褐色、前・後縁は茶褐色、R4, M1, M3室に鱗粉のない透明な部分がある。後翅の地色は暗褐色、中室部分に鱗粉が少ない透明があった部分が見られる。雌は無翅、“脱皮”後も蛹の殻の中に幼虫のような特殊な形態でとどまっている。

分布: (県内) 2000年1月現在確実な産地は北九州市小倉北区山田緑地、田主丸町

(県外) 本州、四国、九州、沖縄

(国外) インドネシア (スラウェシー)、ソロモン、東南アジア各地、中国、台湾、朝鮮半島

生活史・生態・生息地: 年1化。5月下旬~6月にかけて羽化し、雌はミノの中に極めて多数の卵を産卵する。孵化した幼虫はいわゆる「ミノムシ」として葉を食べ、極めて多食性。しばしばプラタナスなどの街路樹の被害が報告された。山手にはあまり見られず市街地に分布。そのため侵入昆虫として考えられている。

(上田・佐々木)

準絶滅危惧 (福岡県)

ヘリグロチャバネセセリ

チョウ目 セセリチョウ科 HesperIIDae

学名: *Thymelicus sylvaticus* (Bremer, 1861)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1938年に若杉山で採集された1雄の記録が本県最初の記録である。その後、ほとんど記録がなく、1983年に福智山、1984年に黒木町で採集された記録があるだけである。もともと希少な種と考えられるが、生息地の環境の変化が著しく、衰亡・絶滅の可能性は十分考えられる。

分類・形態: 前翅長は約12mm。

分布: (県内) 若杉山、福智山、黒木町

(県外) 北海道 (西南部)~九州

(国外) 東アジア地域

生活史・生態・生息地: 年1回の発生で、暖地では6月中・下旬~7月に出現する。幼虫の食草はイネ科のクサヨシ、カモジグサ、ヒメノガリヤスなど。生息地は低山地~山地の樹林と草原が適度に混じり合った環境を好む。

(矢田)

準絶滅危惧（福岡県）

オオチャバネセセリ

チョウ目 セセリチョウ科 Hesperidae

学名：*Polytremis pellucida* (Murray, 1875)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1893年に採集された記録が本県最初の記録といえる。1930～60年代には、県内各地で多くの記録があり、その後も1960年代までは普通に見られた。しかし、1970年代後半から報告が急減し、特に福岡市など都市部ではほとんど見かけなくなった。

分類・形態：前翅長は約17mm。

分布：(県内) 福岡市、大根地山、宝満山、若杉山、犬鳴山、高良山、花立山、浮羽郡、北九州市、大牟

田市、瀬高町、香春町、英彦山など

(県外) 北海道～九州

(国外) ロシア極東地域、中国、朝鮮半島、台湾

生活史・生態・生息地：暖地では年2回、6～7月、8～10月に発生する。幼虫の食草はイネ科のクマザサ、ミヤコザサ、ゴキダケなど。生息地は低地～山地の開けたササ原、草原、林縁などで、一般に人里的環境を好む。

(矢田)

準絶滅危惧（福岡県）

オナガアゲハ

チョウ目 アゲハチョウ科 Papilionidae

学名：*Papilio macilentus* Janson, 1877

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1890年に英彦山で採集された記録がある。その後、県内各地の低山地の溪流沿いに広く普通に見られた。しかし、1970年代から減少しはじめ、1980年代以降は公式の記録は激減した。

分類・形態：前翅長は春型で約55mm、夏型で約68mm。

分布：(県内) 福岡市、若杉山、犬鳴山、高良山、北九州市、宝満山、花立山、浮羽郡、三池山、瀬高

町、古処山、広川町、矢部村、熊渡山、英彦山など

(県外) 北海道（西部～南部）～九州

(国外) 中国、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：年2～3化で、普通4～5月（春型）、7～8月（夏型）に発生する。幼虫の食草はミカン科のコクサギ、サンショウ、カラタチなど。生息地は低山地～山地の溪流沿い。

(矢田)

準絶滅危惧（福岡県）

ウラキンシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Ussuriana stygiana* (Butler, 1881)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1934年に英彦山で採集されたのが最初の記録である。その後、犬鳴山、福智山、三郡山地などで少数ながら連続的に記録がある。しかし、1970年代からは英彦山以外の産地からはほとんど報告がなく、全体として個体数、産地とも縮小傾向にある。

分類・形態：前翅長は約20～23mm。

分布：(県内) 福智山、犬鳴山、宝満山、三郡山地、古処山、英彦山地、八女郡仁田原

(県外) 北海道～九州（日本固有種）

生活史・生態・生息地：幼虫の食樹はモクセイ科のトネリコ、コバノトネリコ、シオジなど。九州では、シオジ、ツクシトネリコが主要食樹。卵越冬、年1化性で、6月上旬から発生し、8月いっぱいまで見られる。生息地は冷温帯の落葉広葉樹が中心で、四国、九州では山地性（標高500m以上）となり、溪流沿いに多い。

(矢田・川上)

準絶滅危惧（福岡県）

フジミドリシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Sibatanozephyrus fujisanus* (Matsumura, 1910)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1934年に英彦山の北岳で採集された記録が本県最初の記録とされる。本種の生息地はブナ林帯であるが、ブナ林そのものが1000m以上の山地帯に限定されているため、これまで大きな環境破壊はなく、本種の産地もいまのところ維持されている。しかし、1980年代から公式の報告は減少しており、今後森林伐採によるブナ林の減少の恐れもある。

分類・形態：前翅長は約18～19mm。

分布：（県内）三郡山地、宝満山、那珂川町石谷山、古処山、英彦山地、星野村、釈迦岳・御前岳、犬ヶ岳

（県外）北海道（南部）～九州（日本固有種）

生活史・生態・生息地：幼虫の食草はブナ科のブナ、イヌブナ。卵越冬，年1化性で，6月中旬～7月に発生するが，雌は8月にも見かける。生息地はブナ自然林で特に純林に多い。

（矢田・小田切）

準絶滅危惧（福岡県）

メスアカミドリシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Chrysozephyrus smaragdinus* (Bremer, 1861)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1915年に英彦山で採集されたのが本県最初の記録とされる。その後も本種は英彦山以外でほとんど記録されていない。1970年代以後は成虫の目撃採集記録はなく，全体に個体数は減少しているようである。

分類・形態：前翅長は約21mm。

分布：（県内）英彦山地、犬ヶ岳

（県外）北海道～九州

（国外）サハリン，ロシア極東地域，中国中部・東北部，朝鮮半島

生活史・生態・生息地：幼虫の食草はバラ科のサクラ属のヤマザクラ，オオヤマザクラなど。卵越冬，年1化性で，6月中旬～7月に発生するが，雌は8月にも見かける。生息地は冷温帯落葉広葉樹林で，ヤマザクラなどの食樹のある溪谷に多い。

（矢田・景浦・小田切）

準絶滅危惧（福岡県）

オオミドリシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Favonius orientalis* (Murray, 1874)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1935年に福岡市西油山の中腹で採集された記録が本県最初の記録であるが，1979年より最近の記録はない。本種の生息地であるクヌギ，コナラの二次林は人為による環境改変を受けやすく，これがもともと福岡で希少だった本種の衰亡・絶滅の原因と考えられる。

分類・形態：前翅長は約20mm。

分布：（県内）福岡市，宝満山，八女郡，英彦山

（県外）北海道～九州

（国外）中国東北部～南西部，ロシア極東地域，朝鮮半島

生活史・生態・生息地：幼虫の食樹はコナラ属のコナラ，クヌギ，アラカシ，カシワ，ミズナラなど。卵越冬，年1化性で，福岡の低地では5月下旬から6～7月に発生する。暖温帯と冷温帯の落葉広葉樹林帯が主な生息地であるが，福岡など暖地では照葉樹林帯にも見かける。

（矢田・小田切）

準絶滅危惧（福岡県）

カラスシジミ

チョウ目 シジミチョウ科 Lycaenidae

学名：*Strymonidia w-album* (Knoch, 1782)
カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1924年に英彦山で採集された記録が本県最初の記録である。その後、記録がなかったが、1979年に県内でもハルニレが本種の食草であることが判明し生息が確認された。しかし、1980年代後半から公式の記録がほとんどない。

分類・形態：前翅長は17～19mm。

分布：(県内) 小石原村, 宝珠山村, 甘木市江川ダム, 英彦山, 黒木町
(県外) 北海道～九州

(国外) ユーラシア大陸北部

生活史・生態・生息地：幼虫の食樹はニレ科のハルニレ, オヒョウが普通。卵越冬, 年1化性で, 平地から低山地では5月中旬～6月中旬, 山地では6月上旬～7月中旬に発生する。生息地は特にハルニレの分布とよく一致し, 樹林の残されている溪谷や林縁などに点在することが多い。

(矢田・佐々木)

準絶滅危惧（福岡県）

ミスジチョウ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Neptis philyra* Ménétrières, 1858
カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1902年に採集された記録が本県最初の記録である。その後、英彦山のみから少数採集されているが、1980年代以後記録はほとんどない。

分類・形態：前翅長は31mm(雄)～35mm(雌)。

分布：(県内) 英彦山
(県外) 北海道～九州 (対馬を含む)
(国外) ロシア極東地域, 中国, 朝鮮半島, 台湾

生活史・生態・生息地：幼虫の食樹はカエデ科のイロハカエデ, ヤマモミジなど。4齢幼虫で越冬し, 年1化性。5月下旬から6月に発生する。日本産の *Neptis* ミスジチョウ属のうち最も森林性が強く, 主な生息地は溪谷帯の落葉広葉樹林であるが, カエデ類の植栽がある公園, 神社など人工的な環境にも見られる。

(矢田・佐々木)

準絶滅危惧（福岡県）

ヒオドシチョウ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名：*Nymphalis xanthomelaena* [Denis & Schiffermüller], 1775
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由：すでに1890年に英彦山で採集された記録があり, 1930～70年代には県内各地に普通に見られた。しかし, 1980年代後半から都市部を中心に報告が急減した。本種の衰亡の原因として, 成虫の主な食餌となるクヌギ類の樹液や腐果が減少したことが考えられる。

分類・形態：前翅長は30mm(雄)～33mm(雌)。

分布：(県内) 福岡市, 若杉山, 久留米市, 北九州市, 花立山, 筑後市, 豊前市, 英彦山, 広川町, 矢部村など

(県外) 北海道～九州

(国外) ヨーロッパ東部から中央アジア, ヒマラヤ, 中国, ロシア極東地域, 朝鮮半島, 台湾。

生活史・生態・生息地：幼虫の食樹はニレ科のエノキが普通。年1化性で, 5月下旬～6月中旬に羽化するが, その後, 1～2週間活動してすぐ夏眠から越冬に入る。本来の生息地は, 平地～山地の落葉広葉樹林であるが, 食樹のある里山, 都市の住宅地にも発生する。

(矢田)

準絶滅危惧 (福岡県)

ヒメキマダラヒカゲ

チョウ目 タテハチョウ科 Nymphalidae

学名: *Zophoessa callipteris* (Butler, 1877)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1906年に英彦山で採集された記録が本県最初の記録である。その後、宝満山、八女郡釈迦岳などで採集されているが、1980年代後半から公式の記録は減少している。本種は準日本固有種のうえ、地理的変異があり、福岡産(英彦山)の個体群は大型で明色部がよく発達しているなどの特徴がある。

分類・形態: 前翅長は約25mm。

分布: (県内) 宝満山、英彦山、釈迦岳、権現尾根など

(県外) 北海道～九州

(国外) ロシア, サハリン南部

生活史・生態・生息地: 幼虫の食草はイネ科ササ属のチシマザサ(ネマガリタケ), ミヤコザサ, スズタケ属のスズタケなど。3～4齢幼虫で越冬し、普通年1回, 6～9月に発生する。生息地は主に温帯落葉広葉樹林内のササ群落で, メダケ属, マダケ属などの群落には発生しない。

(矢田)

準絶滅危惧 (福岡県)

サカハチトガリバ

チョウ目 トガリバ科 Thyatiridae

学名: *Kurama mirabilis* (Butler, 1879)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 全国的には普通種であるが, 九州では産地が限定される。特に北部九州での記録は九千部山で1994年に採集された1例のみである。

分類・形態: 日本固有種で1属1種からなる。前翅長20mm。前翅表面の地色は茶褐色, 前縁は濃茶褐色で前縁から翅の前半部は銀白色。翅頂部付近から両側を濃茶褐色で縁取られた茶色の帯が内方へ曲がりながら伸び, M3に達する。本種の和名の「サカハチ」は, この左右の帯がちょうど逆になった八の字に見

えることに由来していると思われる。日本産のトガリバ類では類似の斑紋が見られないので, 同定は容易。

分布: (県内) 九千部山

(県外) 北海道～九州(日本固有種)

生活史・生態・生息地: 成虫は春に出現。幼虫の食樹はクヌギ, ミズナラ, カシワ, アカガシ。幼虫は食樹の葉を2枚合わせた中に潜み, 5月下旬～6月上旬に蛹化するという。

(上田・佐々木)

準絶滅危惧 (福岡県)

チャオビフユエダシヤク チョウ目 シヤクガ科 Geometridae エダシヤク亜科 Ennominae

学名: *Phigaliohybernia fulvifula* Inoue, 1942

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 福岡県では最近分布が確認された種で産地が限定されている。九州では現在のところ, 筑紫耶馬溪から1雄, 九千部山から2雄の3個体のみが記録されている。

分類・形態: いわゆるフユシヤク類で雌は翅が退化している。雄の前翅長は18mm。前翅の地色は淡黄色。灰褐色の鱗粉が全面にちりばめられる個体から亜外縁線の外方は地色が主体の個体まで斑紋変異がある。後翅の地色は淡黄白色。中室端紋は暗褐色。内横線, 二重になった外横線, 亜外縁線は暗褐色, 内

縁付近で明瞭になる。雌の翅は退化し, 後翅は前翅よりも長い。

分布: (県内) 九千部山, 筑紫耶馬溪

(県外) 本州, 九州

(国外) シベリア南東部

生活史・生態・生息地: 食樹はコナラ, イロハモミジ。成虫は晩冬から早春に出現。九州における出現時期はいずれも3月中～下旬である。午後8～9時頃に林間部を直線的にゆっくりと飛翔する。

(上田・佐々木)

準絶滅危惧 (福岡県)

オオシロシタバ

チョウ目 ヤガ科 Noctuidae シタバガ亜科 Catocalinae

学名: *Catocala lara* Bremer, 1861

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 大型のガであるが、もともと九州では大変記録の少ないガで、英彦山、脊振山および長崎県島原の3頭の記録のみである。

分類・形態: 前翅長36mm(雄)~39mm(雌)。前翅表面の地色は灰白色、antemedial line上を走る黒い帯は中室を越えて、外横線で止まるが、この斜帯は特徴的である。また、後翅表面の地色は黒褐色、太い外横線と翅縁部は黄白色。

分布: (県内) 英彦山, 脊振山

(県外) 北海道~九州。九州では福岡と長崎に記録がある。

(国外) 沿海州, サハリン, 朝鮮半島, 中国東北部
生活史・生態・生息地: 食草はシナノキ科のシナノキ。幼虫は細枝に静止し、葉を葉柄の先で噛み切り落とすという奇習が知られている。年1化で成虫は8月~9月にかけて出現。生息地は県内では英彦山, 脊振山に限定されている。

(上田・佐々木)

準絶滅危惧 (福岡県)

ミジンベニコヤガ

チョウ目 ヤガ科 Noctuidae コヤガ亜科 Acontinae

学名: *Ectoblemma rosella* Sugi, 1982

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 全国的にみても数が少なく、九州での記録はこれまで北九州市香月、福岡市油山、福岡市南区および佐賀県多久市のみである。

分類・形態: 前翅長は約6mm。日本産コヤガ亜科で最小の種、更に前翅の翅脈でR2が欠如していることが大きな特徴で、この形質状態で近縁種から容易に区別される。前翅の翅縁はM3で外方に突出する。前翅表面の地色はクリーム色、濃赤色の鱗粉がちりば

められている。腎状紋は黒褐色で中室下方で内側に伸びる。外横線は黒褐色、M3下方で外縁と平行に走る。

分布: (県内) 北九州市香月, 福岡市南区油山

(県外) 本州, 九州 (日本固有種)

生活史・生態・生息地: 詳しいことは不明。成虫の発生期について、油山および福岡市南区ではどちらも1991年8月13日に採集。

(上田・佐々木)

準絶滅危惧 (福岡県)

ミイロコヤガ

チョウ目 ヤガ科 Noctuidae コヤガ亜科 Acontinae

学名: *Shiraiia tripartita* (Leech, 1900)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 大変記録の少ない種で福岡県での記録は2例だけである。低山地の里山的な環境に生息する種と推測されるが、このような環境が減少しつつある。

分類・形態: 前翅長12mm。前翅表面の地色は茶褐色、中央域は広く白色、中室下方でくびれる。前縁と後縁部に黒褐色の斑点が存在する。後翅は黒褐色。外縁線は暗色の半月状紋が連続。縁毛の基部には白線がある。非常に明瞭な斑紋で、日本産のコヤガ亜科には類似種がない。

分布: (県内) 田主丸町

(県外) 北海道, 本州 (新潟, 奈良), 九州 (対馬)

(国外) 中国四川省

生活史・生態・生息地: 幼虫や詳しい生態は不明。本種成虫の記録は日本国内でも非常に少ないので推測の域を出ないが、低山地の里山的環境に生息しているのではないかとと思われる。対馬での記録は、上対馬の標高約300m、周囲はクヌギ・コナラ主体の所(1999年8月14日午前1時頃飛来)。

(上田・佐々木)

準絶滅危惧 (福岡県)

ウスベニキリガ

チョウ目 ヤガ科 Noctuidae ヨトウガ亜科 Hadeninae

学名: *Orthosia cedermarki* (Bryk, 1949)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 全国的に見ても個体数の少ない種であり、県内ではこれまで若杉山、福岡市での3カ所しか記録がない。

分類・形態: 前翅長15~17mm。前翅の地色は赤味を帯びた茶褐色。外横線、亜外縁線、外縁線はいずれも単純、明瞭な淡黄色。後翅は光沢を帯びた白色。翅脈は薄い茶褐色で、外縁部が茶褐色がかかる。このような配色の日本産 *Orthosia* 属はほかになく識別は容易。

分布: (県内) 若杉山, 福岡市 (柏原, 油山)

(県外) 北海道, 本州, 四国, 九州 (大分)

(国外) 沿海州, 朝鮮半島, 中国

生活史・生態・生息地: *Orthosia* 属は早春に成虫が発生する。本種は本州では4月下旬ごろに採集されている。年1化で野外における食餌植物は不明。いわゆる「里山」のガと考えられる。

(上田・佐々木)

準絶滅危惧 (福岡県)

ヒコサンコアカヨトウ

チョウ目 ヤガ科 Noctuidae カラスヨトウ亜科 Amphipyrinae

学名: *Anapamea apameoides* (Draudt, 1950)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 西南日本の限られた産地にしか分布せず、近年の記録も数少ない。福岡市油山において1990年7月29日1雌の記録がある。

分類・形態: 産卵習性が特異なもので幼虫は恐らくborerではないかと推測されている。前翅長雄16mm。雌はより大型化する。前翅地色は橙色がかかった淡茶色。内横線、外横線は茶褐色で細く、波打つ。腎状紋の外半部は橙色。亜外縁線は黄白色で淡い。外縁

線は茶褐色の細い半月形列。後翅の地色は灰色がかかった褐色。

分布: (県内) 北九州市 (皿倉山, 上津役, 市ノ瀬), 英彦山, 福岡市 (柏原, 油山)

(県外) 対馬, 隠岐, 四国, 九州

(国外) 中国湖南省

生活史・生態・生息地: 幼生期は不明。成虫は7月中旬から8月にかけて採集されている。年1化。

(上田・佐々木)

準絶滅危惧 (福岡県)

エチゴハガタヨトウ

チョウ目 ヤガ科 Noctuidae カラスヨトウ亜科 Amphipyrinae

学名: *Asidemia inexpecta* (Sugi, 1963)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 日本固有種であり、分布も局地的。九州では英彦山, 古処山, 長崎県多良岳などで記録がある。幼虫の食樹であるツゲは高級材として使用され、いずれの産地でも危機的な状態である。

分類・形態: 前翅長21~24mm。地色は全体的に黒褐色。前翅の環状紋と腎状紋は不鮮明ながら、内部の地色が薄いので識別可能。亜外縁域に波形模様があら、本種の和名の由来となっている。

分布: (県内) 英彦山, 古処山

(県外) 本州, 九州 (日本固有種)

生活史・生態・生息地: 幼虫の食樹はツゲ科のツゲ。石灰岩や蛇紋岩からなる岩の露頭に生えるツゲ類に依存し、生息地が限られている。成虫は年2化。国の特別天然記念物に指定されている古処山のツゲ原生林において、ライトトラップにより成虫が数百個体飛来した (7月中旬)。

(上田・佐々木)

(文献)

- 足立一夫, 1970. スギタニルリシジミを深倉峡で採集. 北九州の昆虫, 16(1/2): 42.
- 土井義金・河村 忠・岸 武信・持松文彦・中山真輝・上田将人, 1969. 北九州市の鱗翅類目録. 北九州の昆虫, 15: 1-88, pls. 1-7.
- 江崎梯三, 1934. 日本産 *Zephyrus* 綜説(2). *Zephyrus*, 5(4): 194-212.
- 淵上亀之助, 1938. 今年得たる主要なる昆虫. 自然と趣味, 8(1): 43-46.
- 福田晴夫, 1970. スギタニルリシジミの食樹ミズキの確認. *Satsuma*, 19(57): 53-56.
- 福田晴夫, 1976. チョウの生態観察法. 111 pp. ニュー・サイエンス社, 東京.
- 福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健・高橋 昭・高橋真弓・田中 蕃・田中 洋・若林守男・渡辺康之, 1982-84. 原色日本蝶類幼虫生態図鑑, Vols. I-IV. 保育社, 大阪.
- 氷室 俣, 1951. 愛知県のシルヴィアシジミ. 佳香蝶, 3(3/4): 26-31.
- 井手定雄, 1964. スギタニルリシジミ福岡県に産す. *Pulex*, (3): 137-138.
- 岩崎郁雄, 1978. タイワンツバメシジミの生態について. *Satsuma*, 27(76): 46-74.
- 行徳直巳, 1981. 蛾類(ヤガおよびジャクガ科)2種の新産地. 北九州の昆虫 28(2): 76.
- 井上 寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. Vol. 1, pp. 968, Vol. 2, pp. 556, pls. 392., 講談社, 東京.
- Inoue, H., 1942. New and unrecorded Geometridae from Japan. *Trans. Kansai ent. Soc.* 12(1): 8-23
- 神保一義, 1969. 強制採卵によるヤガ科幼虫の飼育. 蛾類通信, 56: 636-642.
- 環境庁自然保護局野生生物課(編), 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブック-. 273 pp., (財)日本野生生物研究センター, 東京.
- 河村 忠, 1958. 福岡県八幡市周辺の蛾類(1). 北九州の昆虫, 5(2): 1-16.
- 河村 忠, 1966. オオチャバネヨトウの再三の発見. 北九州の昆虫, 13(2): 44.
- 河村 忠, 1970. 北九州市の蛾類(1). 北九州の昆虫, 16(3): 95-98.
- 河村 忠, 1984. 福岡県産蛾類目録. 北九州市立自然史博物館自然史資料 1. 339 pp., 北九州市立自然史博物館.
- 河村 忠ほか, 1969. 北九州市鱗翅目目録. 北九州の昆虫, 15: 12-88.
- 河村 忠・福田 治, 1982. 九州脊振山産のヤガ科4種. 蛾類通信, 114: 215-216.
- 川副昭人・今立源太郎, 1956. ルーミスシジミの生活史. 奈良県, 史跡名勝天然記念物調査抄報, (9): 1-18, pls. 17-19.
- 岸田泰則, 1984. ミジンベニコヤガ佐賀県に産す. 蛾類通信, 126: 8.
- 古賀昭次, 1955. 相ノ島のクロツバメシジミ採集記. 筑紫の昆虫, 1(2): 12.
- 楠 亮二, 1993. 九州初記録のチャオビフユエダジャク. 蛾類通信, 175: 437.
- 黒子 浩, 1957. 彦山昆虫目録. I. 鱗翅目. 106 pp. + 4 pls., 九州大学附属彦山生物学研究所.
- Leech, J. H., 1900. *Lepidoptera Heterocera from Northern China, Japan, and Corea. Part III.* *Trans. ent. Soc. London*, 1900: 9-161.
- 三宅義一, 1958. 久留米市近郊の採集地 奥八女の山々. 九州の昆虫採集案内.
- 宮田 彬ほか, 1999. 大分県の鱗翅類. 507 pp.
- 宮崎俊士, 1966. 福智山でルーミスシジミを採集する. 北九州の昆虫, 12(3): 73.
- 長野菊次郎, 1983. 筑前国産蝶類一斑. 動物学雑誌, 5(60): 391-393.
- 西田圭志, 1977. 釈迦岳でキバネセセリを採集. *Korasana*, 17(1/2): 32.
- 西尾規孝, 1986. *Catocala* 終齢幼虫はどこにいるのか. 誘蛾灯, 106: 119-121.
- 怒和貞賞, 1961. 英彦山のアイノミドリシジミ. 北九州の昆虫, 8(3): 95.
- 小木広行, 1982. オオチャバネヨトウとキスジウスキヨトウの幼虫. 誘蛾灯, 87: 11-13.
- 大庭道夫, 1967. ウスベニキリガの九州での採集例. 昆虫と自然, 2(4): 36.
- Pool, R. W., 1989. *Lepidopterorum Catalogues 118 Nocutuidae Parts 1-3.* 1314 pp., E. J. Brill.
- 佐々木公隆・小藤佳紀, 1998. 福岡市油山の蛾類 III. 福岡市油山自然観察の森 自然環境調査報告, 3: 5-12.
- 佐田禎之助, 1969. オオチャバネヨトウを大牟田市で採集. *Korasana*, 9(1): 18.
- 清 邦彦, 1969. 富士山周辺のギンイチモンジセセリ. 駿河の昆虫, (94): 2741-2760.
- 清 邦彦, 1984. 静岡県および山梨県における河川敷・堤防・海岸の蝶覚え書(3). 駿河の昆虫, (126): 3633

- 柴原克己, 1999. 長崎県の蛾類の調査の現状. 30 + 4 pp., 日本鱗翅学会第46回大会ポスター及びシンポジウム「九州の蛾類調査の現状」資料.
- 柴原克己, 2000. 長崎県未記録の*Catocala*2種. *Koganemushi*, (64): 30
- 新海義治, 1990. ウラゴマダラシジミの記録. わたしたちの自然史, (34): 23.
- 白鳥一樹, 1983. キバネセセリ幼虫の越冬態観察報告. まつむし(67): 1-4.
- 白水 隆, 1931. 福岡市附近の蝶類. 自然と趣味, 2(2): 64-75.
- 白水 隆, 1935. クロツバメシジミ福岡県相ノ島に産す. 新昆虫, 8(12): 40.
- 白水 隆, 1936. 福岡市附近の蝶類 (追加2). 自然と趣味, 6(2): 83-87.
- 白水 隆, 1983. 学研生物図鑑 昆虫I チョウ. 306 pp., 学習研究社, 東京
- 杉 繁郎, 1982. ヤガ科. 井上寛ほか, 日本産蛾類大図鑑 1. pp. 669-913.
- 高千穂宣麿, 1890. 英彦山ニ産スル蝶類. 動物学雑誌, 2(25): 471.
- 高崎浩一郎, 1982. *Zephyrus* 類の生態観察(V)・蛹化場所についての観察(その3). 宮崎の蝶, (28): 1-11.
- 田中和良, 1981. 調布市多摩川流域におけるギンイチモンジセセリの生態について. 紀要(日本大学豊山中・高等学校), (13): 65-82.
- 上田将人, 1956. 留意すべき北部福岡県の小灰蝶. 北九州昆虫趣味の会会誌, (6): 9-10.
- 梅林 学, 1936. 福岡市附近の珍種. 虫と趣味 (1): 16-17.
- 梅野 明, 1928. 福岡県の蝶類(4). 昆虫世界, 32(3): 79-80.
- 柳田慶浩・佐々木公隆, 1997. 九州本土産フユシヤク類の記録 (III). 蝶と蛾 48(2): 65-72.
- 矢野宗幹, 1901. 英彦山紀行(3). 博物ノ友, 1(5): 17-19.
- 矢野宗幹, 1902. 豊前企救郡三月ノ蝶類. 博物ノ友, 2(10): 23.
- 安河内養真, 1962. 英彦山の4種の生活史 (追補). 北九州の昆虫, 9(3): 37-46
- 矢田 脩・上田恭一郎(編), 1993. 日本産蝶類の衰亡と保護 (第2集). vii + 208 pp., 日本鱗翅学会, 大阪・(財)日本自然保護協会, 東京.